

フィリピンの家内工業

——バタガス州パウアン町の鍛冶業——

佐 竹 眞 明

はじめに

- I パウアンの鍛冶業—概観—
- II パウアンの鍛冶業—歴史—
- III パウアンの鍛冶業—分析—
- IV パウアンの鍛冶業—問題点—
- V 展望

はじめに

——なぜ鍛冶屋か——

筆者はこれまで開発経済学、社会変動論を研究する中で、いわゆる近代化論、従属理論^(注1)だけでは世界各地域の発展の展望を検討できないのではないかと考えてきた。

たとえば、東南アジア諸国が相応の経済成長を遂げていく中で、現在のフィリピン経済が諸問題をかかえ、困難に直面している点については「近代化は普遍的溶剤である」^(注2)という命題に象徴される近代化論は単純に適用できまい。また、経済成長を阻害する要因として、同国経済に対するアメリカ、日本などの外国経済の及ぼす影響を重視する、従属理論に代表し得る見解がある。この見解によれば、圧倒的な外国企業、外国貿易の否定的な影響が指摘され、フィリピン経済は外国経済に従属し、現地・民族資本は不利な立場からたやすく脱却できないというのである^(注3)。

確かにフィリピンでは外国工業製品の存在は顕著であるものの、一方で、特に地方に滞在すると、さまざまな工芸品等地方の産物の豊富さに驚くこ

とがある。これらを生産する産業は地方に根付き、相当数の人々を雇用しているようである。そこで、そうした産業はどのような実態をそなえ、フィリピン経済の中で、どのような位置にあり、それに対してどう貢献をしているのか、また、同国の経済発展にいかにか寄与し得るか、検討する必要がある。すなわち、これらの産業はフィリピンの内発的・自立的発展^(注4)に対し、きわめて重要な意義を持っていると考えられる。

フィリピンの地方産業についてフィリピンでは、国立フィリピン大学農学部や同大学の小規模産業研究所、同国の通商産業省などが、日本では途上国経済研究を専門とするアジア経済研究所が研究を発表している^(注5)。だが、日本ではこうした研究は多いとはいえないようであり、本稿により、そうした間隙を少しでも埋めたいと考える。

(注1) 近代化理論では富永健一「『近代化理論』の今日的課題——非西洋・後発社会発展の理論を求めて——」(『思想』第730号 1985年4月)など。従属理論ではA・G・フランク著 大崎正治他訳『世界資本主義と低開発』柘植書房 1978年などを参照されたい。

(注2) Levy, Marion J. Jr., *Modernization: Late-comers and Survivors*, ニューヨーク, Basic Books, 1972年, 5ページ。

(注3) Lichauco, Alejandro, *Nationalist Economics, History Theory and Practice*, ケソン市, Institute for Rural Industrialization, 1988年。

(注4) 内発的発展については鶴見和子「国際関係と近代化・発展論」(武者小路公秀・蠟山道雄編『国際学——理論と展望——』東京大学出版会 1976年)／同「内発的発展論にむけて」(川田侃・三輪公忠編『現代国際

関係論』東京大学出版会 1980年)／鶴見和子・川田侃編『内発的發展論』東京大学出版会 1989年。

(注5) Institute for Small-scale Industries(ISSI), University of the Philippines(UP), *Small & Medium Industries in the Philippines: An Overview*, 第2版, ケソン市, ISSI, UP, 1989年／同, *Small & Medium Business Improvement in the Philippines*, ケソン市, ISSI, UP, 1990年／福島光丘「中小企業と家内工業の役割と展望」および野沢勝美「マリキナの靴産業」(福島光丘編『フィリピンの工業化——再建への模索——』アジア経済研究所 1990年)／稲田実次『フィリピン家内工業の研究』広島修道大学総合研究所 1982年。

I バウアの鍛冶業

——概観——

1. バウアとの出会い

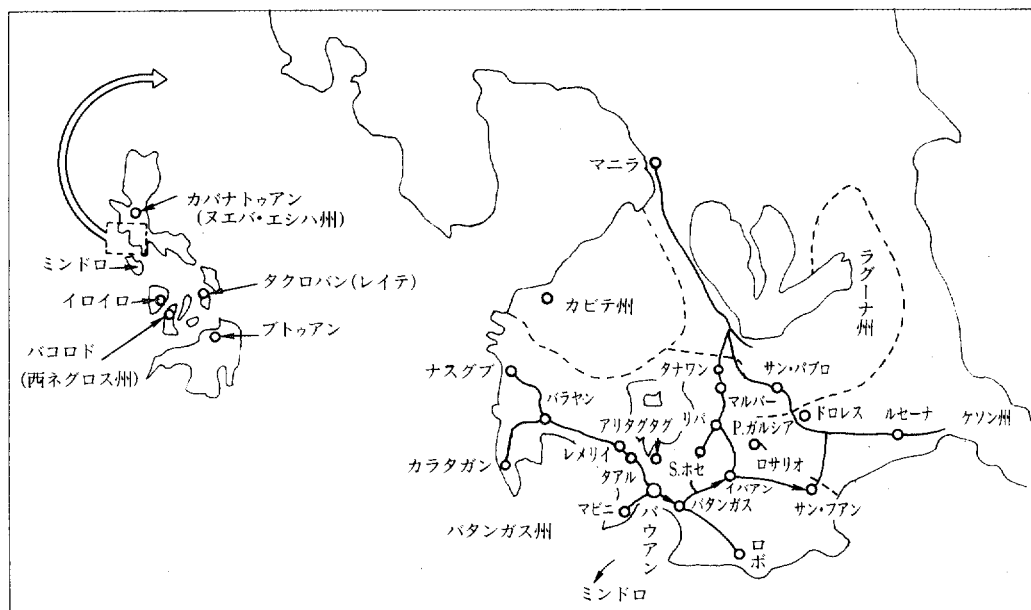
1986年11～12月, 筆者は地方産業・経済を調べるべくバタンガス(Batangas)州を訪れた(注1)。そして, バウア(Bauan)町の鍛冶業についてはリ

パ(Lipa)市にあったNACIDA(国家家内工業開発庁)のRegion IV(注2)オフィスで書き取った家内産業リストに多くの工房が記載され, 特にパンダヤン(Pandayan)という地域に山刀, 鎌を製造する工房が8軒リストアップされていた。パンダヤンとはフィリピン語で「鍛冶屋」を意味しており, 「鍛冶屋村・町」の存在が想像された。次いで, 筆者はリストをもとにバウアの鍛冶屋を4軒訪れた。集落を貫く舗装道路ぞいに並ぶ鍛冶屋の軒並みはそこに響く槌の音とともに筆者の関心をかきたてた。この訪問が予備調査となり, 1987年11月から88年7月までの正味6カ月ほどの本調査につながったのである。1991年8月には同地で追跡調査を行っており(8月17～23日), その結果についても触れていく。

2. バタンガス経済について

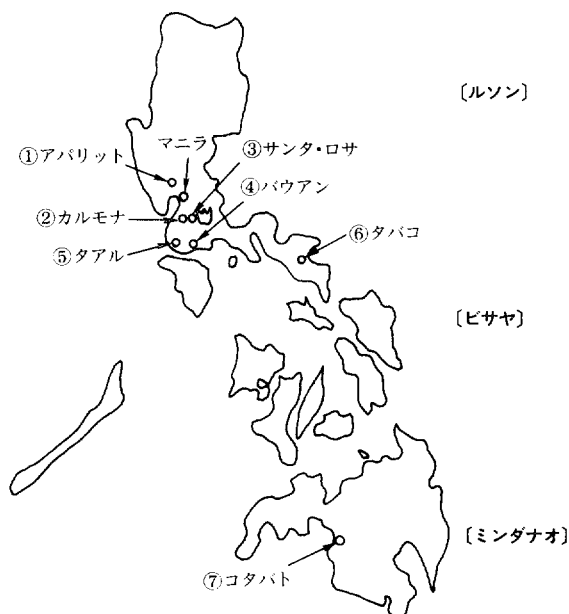
マニラから公共機関バスで約3時間南に下ると,

第1図 フィリピン全国とバタンガス州



(出所) Petrophil Corporation, *Philippine Motorists Road Guide*, 第7版, よりトレース, 加筆。

第2図 フィリピンの鍛冶業中心地



(出所) 第1表の資料, 調査に加え Metal Industries Research and Development Center (MIRDC), *Metal Working Industry of the Philippines*, メトロ・マニラ, 1974年/Small Business Assistance Center (SBAC), *Study on the Farm Implements Industry in Region X*, マニラ, SBAC, 1982年/National Cottage Industry Development Authority (NACIDA) Region 3, *Registered Metalcraft Producers Situationer in Apalit, Pampanga*, マニラ, 1986年/MIRDCの技官 Emmanuel V. Nolasco 氏へのインタビュー (1988年3月23日)。

(注) 丸数字は第1表を参照。

バタンガス州の州都バタンガス市に到着する(注3)。同州にはさまざまな地方産業が存在し、レメリー (Lemery), タアル (Taal) 町の刺繍, バラヤン (Balayan) 町の塩辛, 魚醬(注4), イバアン (Ibaan) 町の蚊帳, タアル, アリタグタグ (Alitagtag) 町の木彫り製品, サン・フアン (San Juan) 町の椰子酒蒸留酒 (ランパノグ [lambanog])(注5), リバ, サン・ホセ (San Jose) のコーヒー, パドレ・ガルシ

ア (Padre Garcia) 町の酪農, リバの柑橘類 (カマンシー, みかん) 等が知られる (第1図参照)。

これらはそれぞれ伝統のある地方産業であり, 同州の経済基盤の強さをうかがわせる。そうした産業の中で, 金属鍛造・加工業である鍛冶業はバウアン町の農具, タアル, レメリー町の折り畳みナイフ (バリソン [balisong]) 製造に見られる。

3. バウアンの鍛冶業について

(1) フィリピンの鍛冶業

フィリピンでは鎌, 山刀といった農具などを生産する鍛冶業の中心地が第2図, 第1表のように分布している。農具のみならず, はさみ, ニッパー, 折り畳みナイフなどの製造業者が集中する地域もある。なかでも, 農具ではパンパンガ (Pampanga) 州のアパリット (Apalit), バタンガス州のバウアン, 折り畳みナイフでは同州タアル, レメリー, はさみではアルバイ (Albay) 州のタバコ (Tabaco), ラグーナ (Laguna) 州のサンタ・ロサ (Santa Rosa) などがよく知られている。このうち, 筆者はバウアンに加え, アパリット, タアル, レメリー, サンタ・ロサ, カルモナ (Carmona) を訪れている。

(2) バウアンの町

バタンガス州バウアン町へは前記バタンガス市から, 乗り合い自動車ジープニーに乗り, 西へ20分ほど移動すると到着する。町の土地面積の62%が農地であり, 米, とうもろこし, 野菜, 豆類の栽培や酪農などが主な産業である。マニラからの距離は120km (バタンガス市は112km), 面積は6600km², 人口は1990年時で5万9237人である。ちなみにバタンガス市は1985年時で16万4421人である。バウアンは農業中心の町であり, 道路舗装率, 水道普及率などから州内ではバタンガス市に次ぐ一級の町ともいわれる(注6)。

第1表 フィリピン鍛冶業主要産地と主要生産品目

地名 かっこ内は州名	工房数	生産品目
①アパリット (パンパンガ)	約60	鎌, 山刀, 斧, ノミ, つるはし, 鋏, カンナ, こて, ケーン・ナイフ, キッチン・ナイフ, 石工ごて, 屠殺包丁, 鉋, 植木鋏, スコップ, 農機具の刃。
②カルモナ (カビテ)	5	鉋, 山刀, 斧, ケーン・ナイフ, こてなど。
③サンタ・ロサ (ラグーナ)	約15	鋏, ニッパー。
④バウアン (バタンガス)	24	鎌, 山刀, 包丁, 鉋, カンナの刃, 椰子の果肉削り, ナイフ, 鋏, 穴掘棒。
⑤タアル (バタンガス)	15	バリソン (折り畳みナイフ), 狩猟ナイフ, 飛び出しナイフ, 山刀, ケーン・ナイフ, 斧, 椰子の実摘み, 鋏, 屠殺包丁。
⑥タバコ (アルバイ)	約30	鋏 (床屋鋏, 洋裁鋏, 皮革用鋏, 植木鋏など), ニッパー, ひげ剃り刃, 山刀, ナイフ, ノミ。
⑦コタバト (マギンダナオ)	約20	山刀, 鋏, 鋤, 鉋, 鎌など。

(出所) ①⑤⑥: Nolasco, Emmanuel V.; Florentino M. Cuasay, *Report on the Visits to the Farm Tools and Cutlery Industries of Pampanga, Batangas and Albay*, マニラ, MIRDC, 1982年。

①②③④⑤: 筆者による調査。

⑦: SBAC, *Farm Implements in North Cotabato, Region XII*, マニラ, 1983年。

(注) 以上はフィリピン全体の鍛冶業の一部にすぎない。特にビサヤ, ミンダナオ地方については今後の調査課題である。

(3) バウアンの鍛冶屋

バウアン町の中心地は役場, カトリック教会, 公設市場の存在するポブラシオン (poblasyon. 村 [baryo] に対し町の中心地を意味する) と呼ばれる地域である (第3図参照)。ポブラシオンにはレストラン, 映画館, ガソリン・スタンド, 商店街, 小学校, ハイ・スクールも集まり, 人口6万人近くの町の中心部を形成している。そこから, 州内の商業中心地タアル, レメリー, パラヤンに通じる国道に沿って, 西に進むと徒歩10分ほどで鍛冶工房が集中する地帯に到達する。通称鍛冶屋村 (Baryo Pandayan) であり^(注7), 確認した範囲で, 24軒の工房が集まっている。バウアン町に隣接す

るサン・パスカル (San Pascual) 町のバウアン寄りにも鍛冶屋があり, バウアンのポブラシオン周辺には25軒の鍛冶業者が偏在していることになる。

これらの工房で主に造られているのは鎌 (karit), 山刀 (gulok, itak)^(注8)である。その他, 工房によっては鋏 (asarol), 水牛に引かせる犁 (araro), 地面の穴掘棒 (bareta), やしの実の果肉をこそぐ道具 (kayuran ng niyog) も製造しているが, 中心は鎌と山刀である。特に第2表に見るようにどの工房も鎌の生産を行っており, フィリピンの中でもバウアンは鎌の産地として名高い。フィリピン全体の鎌の需要の3分の1以上を供給していると

第2表 各工房での生産品目

経営者名	生産品目
① Jaime Abanto	鎌，全鋼の山刀（割り込み刃金の山刀*は上手な向う槌がおらず，生産を止めた）。
② Fabian Dalangin	鎌が中心。全鋼，割り込み刃金の山刀，全鋼，割り込み刃金の包丁，鉋，鋏，椰子の果肉削り，穴掘棒など。
③ Oseas Durante	鎌。
④ David Magnaye	鎌。
⑤ Eladio Dimalibot	鎌。
⑦ Tudor Garcia	鎌が中心。山刀も造る。
⑧ Ana Garcia	鎌，山刀，ナイフ（包丁），穴掘棒。
⑨ N. Bautista	山刀が中心。鉋，鎌，穴掘棒，包丁。
⑩ Bonifacio Abaday	挟み込みの山刀が中心。鋏，穴掘棒，鎌，ナイフなど。
⑪ Ruben Bautista	山刀，鎌，鋏，穴掘棒。
⑫ Jun Aguila	鎌。山刀造りはしない。特に割り込み刃金は職人がいない。
⑬ E. Abanto	鎌。
⑭ Lito Asero	鎌が中心。全鋼，全鉄の山刀も少量生産。カンナの刃，椰子の果肉削りなど。
⑮ F. Abrinica	鎌，山刀（割り込み刃金も含む）。
⑯ G. Roxas	鎌。
⑰ A. Desepeda	鎌，山刀。鎌は1日300本，山刀は4，5本。
⑱ Petronia Cordero	鎌。パウアンでも山刀をしっかりと打てる人は多くない。
⑲ Tsiofila Bico	鎌。
⑳ A. Cordero	鎌，山刀。
㉑ Juan Cordero	山刀。割り込み刃金の名手。1日4，5本。
㉒ Pedro Cordero	鎌，全鋼・割り込み刃金の山刀，椰子の果肉削り，包丁など。
㉓ Sofronio Tejada	鎌中心。時々，全鋼・全鉄の山刀を生産。

（出所）筆者による調査。

（注）丸数字は第3図と同じ。

*山刀には3種類ある。刃先に鋼を挟み込んだ割り込み刃金ディスボ (disubo), および全鋼 (payak) と全鉄 (bakal) である。最も耐久性があり，高価なのがディスボ。

推計されるほどである（注9）。

次に経営規模について，通商産業省の中小企業開発局 (Bureau of Small and Medium Business Development: BSMBD) の定義によると，従業員数が10名以下で，総資産が50万ペソ以下の企業を家内工業と呼ぶ（注10）。この定義に従うと，パウアンの工房では従業員＝職人が3～4名の例が多く，ほとんどが家内工業レベルといえよう。職人を常時15

～16名雇用し，小規模産業と分類できる例もあるが，掛け持ちの職人を随時雇ったり，他の工房や独立した職人に下請けに出したりする例が多く，ほとんどの工房で常雇いの職人（従業員）は10名以下である（第3表参照）。

また，同地の鍛冶業への就業依存を検討してみよう。掛け持ち職人や，複数の工房からグラインダー掛けを請け負う職人もおり，正確な数の把握

第3表 各工房での職人数・就労形態

経営者名	職人・従業員数，就労形態
① J. Abanto	不定。注文があったとき，相方を雇う。2
② F. Dalangin	Fabian氏を含め，4兄弟で作業分担。同氏は作業の他，経営，会計を担当，出来高制で弟たちに賃金を支払う。3
③ O. Durante	不定。8～11，1～4月は10～15名。他の月は6名。営業，販売に専念。弟が親方役，グラインダー掛けを担当。7あるいは11～16
④ D. Magnaye	8
⑤ E. Dimalibot	15
⑦ T. Garcia	不定。掛け持ちが多く，多いときで8名。8
⑧ A. Garcia	8名。
⑨ N. Bautista	助手として，いとも2名。2
⑩ B. Abaday	5名雇うことあり。5
⑪ R. Bautista	臨時に雇うのみ。2
⑫ J. Aguila	職人を2名くらい「借りる」。2
⑬ E. Abanto	不定。孫娘（23歳）が会計を担当。2
⑭ L. Asero	不定。経営，販売に専念。各工程に1名，計7名が作業。刃づけ，グラインダー掛けも委託する。7
⑮ F. Abrinica	向う榎の職人はアバダイ，ディセピーダ工房と掛け持ち。第3名も作業に従事。4
⑯ G. Roxas	雇用数は不定だが，鍛造の2名を常時雇用。鎌の鉤歯づけは下請けに出す。夫婦で経営に専念。2
⑰ A. Desepepa	息子2名と甥が生産に従事。アバダイ，アブリニカ工房との掛け持ち職人を雇うことあり。姉のMerced Briones（52歳）さんと経営，販売に専念。6
⑱ Petronia Cordero	専従の職人が4名。経営，販売に専念。4
⑲ T. Bico	職人は不定期に7名雇用。夫Roy Bico氏と経営，販売に専念。7
⑳ A. Cordero	職人2名。息子のProceso氏（37歳）も職人で，1987年調査時，サウジ・アラビアで出稼ぎ中。3
㉑ J. Cordero	甥のErnesto Abu氏，パウアンの市場で知り合った若者（17歳）を助手として雇用。2
㉒ Pedro Cordero	甥で，アバダイ氏の息子であるSamson Abaday氏が助手。その他職人が2名。3
㉓ S. Tejada	7名の子どものうち，5名が作業に従事。作業によっては，さらに1，2名雇う。経営，会計に専念。5～7

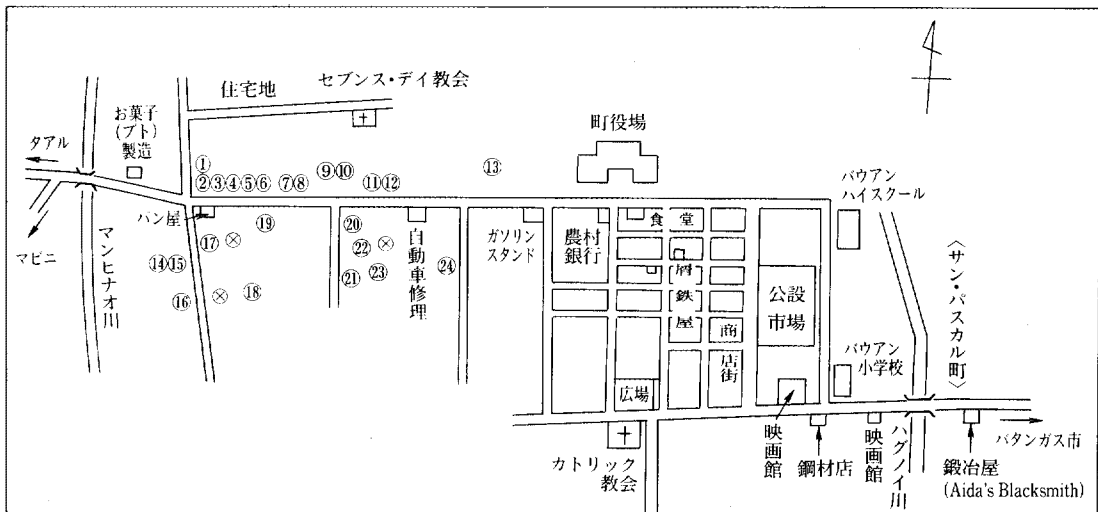
（出所） 第2表と同じ。

（注）（1）氏名の前の丸数字は第3図，第2表と同じ。

（2）文末の数字は職人（従業員）数。

（3）職人（従業員）最大の人数を足すと118名。これから3工房で掛け持ちをしている1名の職人の分を差し引いて116名。これに所有・経営者24名を足して，140名。

第3図 バウアン町の中心地と「鍛冶屋」地域



(出所) *Zoning Map of Poblacion, Municipality of Bauan*, 出版年月日不明／筆者による調査。

(注) ⊗は休廃業の鍛冶工房，丸数字は第2表の工房を表わす。

第4図 鎌の製造工程

①鍛造	→②整形	→③グラインダー掛け	→④鉅歯づけ	→⑤刻印	→⑥焼き入れ	→⑦仕上げ
<i>hagot</i>	<i>korte</i>	<i>pagkikil</i>	<i>pagtadtad</i>	<i>pagtatatak</i>	<i>pagsusubo</i>	<i>paglimpiya</i> (磨き)
forge	shaping	sharpening	<i>ng ngipin</i>	trademark	heat	final finishing
			serration	stamping	treatment	and polishing

各工程の概要

- ① 車輪杵を火床で熱し、ハンマーでたたき、60～72の鉄片に裁断。それを熱し、たたき、鎌の原形を造る。鋼棒使用の際はそのまま、くべ、熱し、たたく。
- ② ①の工程でできた型を火床で熱し、たたき、形を整える。握りをつける部分も整形。
- ③ 電動の研磨グラインダーにより、歯の部分を鋭くする。
- ④ 小型の堅固なノミにより、刃先に鋸状の刃を付けていく。刃がぶれないように補助者が鎌を押さえることもある。
- ⑤ 各商標を刻印する。
- ⑥ 鎌を熱し、水に漬け、すぐ取りだし、地面におく。焼戻しは行なわない。
- ⑦ 焼き入れで歪んだ鎌を角床の上で、小槌でたたき、ひずみをとる。

電動グラインダーで金属製のブラシを回転させ、鎌を磨く。

日本ではニスとシンナーを混ぜた液体を塗り、錆止めをするが、バウアンでは錆止めはしない。また、刃が鋸歯状であるので、砥石にもかけない。

(出所) 筆者による調査／*Metalworking Industries Association of the Philippines (MIAP), Feasibility Study on Setting up and Operating a Common Service Facility for Smithery in Region IV*, メトロ・マニラ, 1990年, 9～12ページ。

(注) 斜体字はバウアンでの呼称。

は困難である。ただし、フィリピン金属工業連盟 (Metalworking Industries Association of the Philippines: MIAP) の調査によると、所有経営者は24名で、最初の工程（鍛造）を担当する職人2名が各工房におり、他の7工程を行なう職人が2つの工房を掛け持ちしているとして、次のように推計し得るという。

所有・経営者	24 (名)
鍛造成形担当	2×24=48 (名)
他の工程担当	7×12=84 (名)
計	156名 ^(注11)

筆者の調査でも第3表からわかるように、同地の鍛冶業従事者は約150名で、家族などを含めると、同地では500～700、800名が鍛冶業に生活依存しているものと思われる。また、こうした産業が「家内工業」（英語では household or home industry）とも呼ばれるように、小規模産業では労働力として家族、親族に依存する割合が高い。安定した労働力を確保し、賃金コストを下げるためでもある。同表から、そうした事情も読み取れよう。

なお、パウアンでの鎌の生産工程は第4図の通りである。足踏み自動ハンマー（ベルトハンマー）、電気炉が普及した日本の鍛冶業と異なり、ふいごを手で回し、横座と向う槌が槌を振るう伝統的な作業が続いている^(注12)。

（注1）調査地としてバタンガスを選択したのは、同州がマニラ首都圏に隣接せず、比較的独立した経済圏を有し、筆者の言語（フィリピン語）能力の及ぶ地域であるため。

（注2）フィリピンの行政区分でバタンガス、ラグーナ、ケソン (Quezon) 州など11州は第4地域——南部タガログ地方と呼ばれる。

（注3）バタンガス市の公設市場については拙稿「市場における人間関係と市場の経済的機能——東南アジア市場研究とフィリピンでの調査事例を踏まえつつ——」

（『アジア経済』第29巻第5号 1988年5月）を参照。

（注4）拙稿「近代化と伝統的技術・産業——フィリピンの塩辛・魚醬生産を例にして——」（『平和研究』日本平和学会 第15号 1990年11月）参照。

（注5）Carracedo, Iona V., "Economic Analysis of the Lambanog Industry in San Juan, Batangas," 卒業論文, BS Agricultural Economics, University of the Philippines, Los Baños (UPLB), 1983年。

（注6）Bauan [パウアン町資料], パウアン, Municipality of Bauan, 1985年 / *Bauan (Profile)*, 1991年。

（注7）正確にはバランガイ・マンヒナオ (Barangay Manghiniao) に属す。バランガイ・マンヒナオには5つの地区 (sityo) があり、鍛冶屋村はそのひとつである。

（注8）山刀はパウアンを含めバタンガス州ではグロック (gulok), 首都マニラその他ではイタック (itak) と呼ばれる。また、インドネシアでは山刀をゴロック (golok) といい、フィリピンでの呼称と類似する。朝岡康二「ジャワ島の鍛冶屋の村を訪ねて」（『あるくみるきく』日本観光文化研究所 第202号 1983年12月）12ページ / 村井吉敬『小さな民からの発想』時事通信社 1982年83ページ。英語で山刀は "bolo" という。

（注9）フィリピン全体の鎌の需要は米の生産量から推計し得る。鎌は平均1人、2.5ト収穫すると刃先が磨耗し、使用されなくなる。たとえば、1988年米の収穫量は897万1000トで、これを2.5で割ると鎌の需要は358万8000本。パウアンの年生産量は約125万本と推計され、パウアンが全国の鎌の需要の34.8%を満たしていると計算される。

Metalworking Industries Association of the Philippines (MIAP), *Feasibility Study on Setting up and Operating a Common Service Facility for Smithery in Region IV*, マニラ, 1990年, 21ページ。

（注10）BSMBD, *Programs and Services for Cottage, Small and Medium Enterprises*, マニラ, BSMBD, 1988年, 10ページ。

（注11）MIAP, 前掲報告書, 13ページ。

（注12）日本の鍛冶業について筆者は1991年9月27～28日に高知県香美郡土佐山田町で、4業者を訪れ、インタビューした。香月洋一郎・香月節子『むらの鍛冶屋』平凡社 1986年 / 村松貞次郎『鍛冶の旅』芸艸堂 1985年も参照されたい。

II バウアンの鍛冶業

——歴史——

1. フィリピンの鍛冶業の歴史

16世紀初頭スペイン植民統治以前にフィリピン群島を訪れたスペイン人宣教師は同地での新月刀使用を記した^(注1)。実際、1521年フィリピン群島に到着したポルトガル人フェルディナンド・マゼランは、マクタン島のリーダー、ラプラブに新月刀、あるいは、独特の歪曲した刀クリス(kris)によって殺害されたといわれる^(注2)。当時、群島にはこうした武器を製造する鍛冶職人がすでに存在したようであり、フィリピンの歴史家アゴンシリョ(Teodoro Agoncillo)も紀元前200～300年にフィリピン群島に移り住んできたマレー系の人々が鍛冶技術を持ち、武器をつくれたと述べている^(注3)。ちなみに、インドネシアでも、鍛冶屋をパンダイ(pandai)と呼ぶ^(注4)。フィリピンの主要言語タガログ語に基づくフィリピン語においても鍛冶屋はパンダイ(panday)、正確にはパンダイ・バカル(panday bakal)と呼ばれる。パンダイは職人、バカルは鉄という意味である。「鉄の職人」で鍛冶職人を指し、鍛冶屋の工房は場所を示す接尾辞anをつけて、パンダヤン(pandayan)となる。

2. バウアンの鍛冶業の歴史

(1) スペイン時代(1565～1898年)

では、バウアンにいつ、どのように技術が伝わり、鍛冶業が始まったのか。老経営者からも明確な回答は得られなかった。ただし、同時代、バウアンに鍛冶屋が存在し、農具の他に馬のひづめも造っていたらしい^(注5)。

(2) アメリカ時代(1902～41年)

正確な年代を確認できるのはアメリカ統治時代^(注6)の1920年代である。具体的には、工房経営者A・ディセピーダ(Angelita Desepeda)さんの父故S・ディセピーダ(Silvestre Desepeda)氏が1928年に工房を設立、鎌、山刀を生産、販売したという。また、工房経営者J・アバンテ(Jaime Abante)氏やT・ガルシア(Tudor Garcia)さんも各々の父が1930年代に仕事を始めたという^(注7)。

実際、1930年代、バウアンで工房を経営していた人は15名に上り、戦前から、同地には鍛冶屋村・町が形成されていたようである。年代、家系はおおよそ第5図のとおりである。

(3) 日本占領時(1941～45年)

1942年中頃台湾拓殖がバウアンへ進出、住民は綿の栽培を強制された。1945年2月、日本の部隊が住民多数を虐殺し、町を焼き払った。3月にはアメリカ軍がバウアンを再占領、町は再建の途についた。鍛冶屋村でも日本占領による被害を受けた人々が存在する^(注8)。また、インドネシアの例とは異なり、バウアンでは日本軍の要請で日本刀を生産した鍛冶工房はなかったそうである^(注9)。

(4) 戦後、アメリカからの物資輸入(1946年～)

主に戦後アメリカから輸入された金床、ふいご、槌、箸が現在でも使用されている。ふいごでも、戦前は中国式の木製で、取っ手を前後に動かす形式が使用されたが、戦後、取っ手を回す金属製のアメリカ製品に変わったという。これらは1946年比米間で締結された通商法(フィリピン通商法、通称ベル通商法)によりアメリカの工業製品がフィリピンに輸入される中で、バウアンにも流入してきたものと思われる。鍛冶道具にも密接な比米間の経済史が反映している。

(5) 組合結成の動き

1946、68年の2回にわたって、生産者組合結成

第5図 工房経営の歴史

	1941年	
33Roque Abanto	Francisco Abanto (67) — 67 Jaime Abanto (41)	①
	68 Rosend Dalangin (86年没) - 80 Fabian Dalangin (32)	②
Felipe Ada		
	46 Cosme Durante 81 Oseas Durante (38)	③
Raymundo Magnaye (44年没)	David Magnaye (76)	④
	46 Eladio Dimalibot (60) - 65 単独経営 共同経営	⑤
	Vic Magnaye	⑥
Roman Magnaye	(69年没)	
30 Roberto Garcia (77)	45 Tudor Garcia	⑦
(職人)	48 Martin Garcia (70年没) 75 Ana Garcia (44)	⑧
Perfecto Garcia		
	56 Bonifacio Abaday (52)	⑩
	45 Juan Bautista 55 Ruben Bautista (55)	⑪
	67 Nehimias Bautista (46)	⑨
	70 Jun Aguila (36)	⑫
Domingo Bautista	(アメリカへ渡航)	
(職人)	57 Estaneslao Abanto (75)	⑬
Kuwado Asero (職人)	67 (職人) 72 Lito Asero (40)	⑭
	Sotero Abrinica (70年没) 70 Francisco Abrinica (37)	⑮
Momento Abanto	(72年没)	
Candido Abanto	(82年没)	
	86 Gregorio Roxas (41) Bening Roxas (50)	⑯
28 Silvestre	74 Angelita Desepeda (46)	⑰
Desepeda	Merced Briones	
	Donesio Paglinawan (職人60年没) — 77 Petronia Cordero (73)	⑱
28 Bico	77 Tsiofila Bico (58)	⑲
	60 (職人) 76 Anastacio Cordero (57)	⑳
Conrado Cordero (86年没)	47 (職人) 79 Juan Cordero (56)	㉑
	48 (職人) 75 Pedro Cordero (53)	㉒
	Paust Magnaye	㉓
	74 Sofronio Tejada (55)	㉔
Domingo Caimbon (67年没)		
Estong Gloria (75年没)		

(出所) 各経営者へのインタビュー。D. Bautista, D. Caimbon, E. Gloria 氏については E. Dimalibot 氏へのインタビュー (1987年12月23日) による。

(注) (1)1941年 (日本軍侵攻) 以前の経営者を示すため、41年の時点で線を引いた。(2)氏名の前の数字は事業を独立した年。(職人) の前の数字は職人として仕事を始めた年。(3)名前の後のかっこ内数字は年齢 (1987, 88年の調査時点)。(4)①～㉔の数字は1987～88年調査時点での工房経営者。同数字は第3図と同じ。(5)斜体はセブンス・デイ・アドベンチスト信者。

の動きがバウアンで見られた。この点については後述する。

(6) グラインダーの使用

ながらくバウアンでは鎌、山刀生産において、鉄やすりで刃の部分が鋭利にされ、1本につき2、3分かったが、1980年代、電動グラインダーが使用されるようになった(第4図・工程③)。1981年バウアンの鍛冶職人2名がパンパンガ州アパリットの鍛冶工房で働き、電動研磨グラインダーの使用を覚え、バウアンへ技術を伝えたのである(注10)。産地間の技術伝播であった。

グラインダー使用により、同工程は1分半ほどになり、生産性が向上した。1960年頃には多くの工房で研磨機＝グラインダーが使用されていた日本(注11)と比べ、20年ほどのギャップがある。

なお、各工房では日本製のグラインダーは質が良く購入したいものの、価格に手が届かず、より安価な台湾製品を購入するとのことであった(注12)。ラグーナ州のはさみの産地サンタ・ロサでも台湾製の電動グラインダーが利用されており、隣接する新興工業経済地域(NIEs)台湾のフィリピン経済への浸透を物語っていた。

(注1) アントニオ・デ・モルガ著 神吉敬三・箭内健次訳『フィリピン諸島史』岩波書店 1966年(原版初版 1609年) 334ページ。

(注2) 大野力『発掘アジア歴史講談』時事通信社 1983年 110ページ／“Si Lapulapu at Ako”[ラブラブと私], *Wika at Panitik*[言葉とペン], ケソン市, JMC Press, 1982年, 100～105ページ。

(注3) Agoncillo, Teodoro, *Kasaysayan ng Bayang Pilipino* [フィリピン国の歴史], マニラ, 出版社不明, 1975年, 10ページ。

(注4) 西ジャワ・スンダ(Sunda)地方での用法。Aten, Drs. A., “Some Remarks on Rural Industry in Indonesia: V. The Pandai's(Blacksmiths) in Western Java,” *Indonesia*, 第6巻第6号, 1953年5月, 536ペー

ジ。

(注5) 工房経営者O・デュランテ(Oseas Durante)氏へのインタビュー(1987年12月18日)。17世紀バウアンは行政区画として、タアル町に含まれていたが、1672年、タアルから分離し、独立した町となった。Socio Politico Cultural Affairs, Office of the Governor, Province of Batangas, “History of Bauan,” 同編, *Old Files*, バタングス, 1975年, 1ページ。

(注6) フィリピンでは1935年独立準備政府コモネルスが成立し、46年独立予定であった。本論では日本軍侵攻の1941年までをアメリカ期としておく。

(注7) A・ディセビダさん(1987年11月30日), J・アバンテ氏(1987年12月6日), T・ガルシアさん(1987年12月22日)への各インタビュー。

(注8) Socio Politico Cultural Affairs, Office of the Governor, Province of Batangas, 前掲資料, 2ページ。工房経営者のD・マグナエ(David Magnaye)氏(76歳)の父は1944年日本軍に殺害された。

(注9) ジャワの鍛冶産地チサアト(Tjisat)では日本軍が日本刀の生産を命令したという。Aten, 前掲論文, 540ページ。

(注10) B・アバダイ(Bonifacio Abaday)氏(1987年12月10日), E・ディマリボット(Eladio Dimalibot)氏(同年12月21日[以下, インタビュー①]), 23日[以下, インタビュー②]), J・コルデロ(Juan Cordero)氏(同年12月2日)への各インタビュー。

(注11) 高知県の例。鈴木文薫・竹村和夫『土佐打刃物読本』高知県土佐刃物連合協同組合 1984年 46ページ。

(注12) バウアンの工房経営者がグラインダーを購入するマニラの商業地区サンタ・クルス(Santa Cruz)では、日本製品は台湾製の2、3倍の価格であった。1988年3月1、5日の調査。

III バウアンの鍛冶業

— 分析 —

1. 親族関係

バウアンへの鍛冶屋集中の理由として、経営者の世代継承があろう(注1)。前述のように1930年代には同地に工房が15軒はあった。そこで気づくのは経営者を継いで、経営を続けるケースが多いことである。第2次大戦前の経営者の末裔13名が今

日でも事業を続けている（第5図）。

これらの例では、経営者が一定の時期職人として、工房で働き修業を積み、技術を身につけ、独立する事例が多い。たとえば、アナスタシオ (Anastacio)、フアン (Juan)、ペドロ (Pedro) のコルデロ (Cordero) 3 兄弟は父コンラド (Conrado) 氏の工房で各々32, 27, 15年間修行し、働き、独立した。

ここで、「鍛冶屋村」の家系親族関係を検討すると、工房経営者24名のうち、19名が親族関係でつながっている。これらの家系とつながる職人もおり、密接な親族関係の中で、鍛冶業が存続してきたことがわかる。実際、多くの工房は軒を並べて存在しており、人々は日常的に身近な付き合いを保っている。第3表に見たように事業においても、家族、親族依存が顕著であり、後述の技術革新の試みもO・デュランテ氏と叔母のT・ピコ (Tsiofila Bico) さんとの共同企画である。

2. 宗教

密接な親族関係を補うのが、キリスト教の一派セブンス・デイ・アドベンチスト (Seventh Day Adventist) の存在である。同派は19世紀初頭、北米で、キリスト再臨の教理と第7日安息日礼拝を主張して組織され、アメリカに本部を持ち、全世界に400万以上の信者を持つ。信者は禁酒、禁煙を守る^(注2)。

フィリピンでも布教活動が行なわれ、バウアンでも、24軒のうち、9軒が同派に所属している（第5図参照）。バウアン町全体ではフィリピン社会同様カトリックが多数であり、特にセブンス・デイ・アドベンチストが多いわけではなく^(注3)、業者の3分の1以上が同派に属しているのは特筆される。9軒は皆姻戚関係にあり、幼児洗礼を受けたり、婚姻に際し、改宗している^(注4)。また、

同9軒は経営が比較的安定し、生産、収入も多い。この点、マックス・ウェーバーが想定したプロテスタント倫理と近代資本主義の精神との関係^(注5)を連想させる。禁欲的で真面目な信仰態度が仕事に影響を及ぼし、堅実な経営をもたらしているとも考えられる。カトリック信者である他の業者には経営が不安定な場合も見られる。

ただし、この点については、同派がインフォーマルな親睦団体としての役割を果たしていることと関連していよう。すなわち、バウアンには鍛冶業者組合が存在せず、業者の過当競争が見られる。そうした中で、毎土曜日の礼拝、年数回の総会などで信者業者が集まる中で、さまざまな情報が交換される。信者間で後述の信用組合加盟、技術革新の動きが見られたり、宗教の人脈を通じて、若い職人が見つかったりする^(注6)。牧師が経営者たちと産業の将来を検討することもある。さらに、むき出しの競争という対立も道徳的に牽制され得る^(注7)。こうして、この宗教活動や活動を通じた人間関係は情報共有化、競争関係の牽制、経営者と職人との関係円滑化、精神的支えといった機能を果たしている。

3. 技術革新

フィリピンでは多くの鍛冶工房で筋力を要する鍛造方法が続いている^(注8)が、バウアンには技術革新の試みがあった。

1981年、O・デュランテ氏はマニラ首都圏で日本製の中古自動鎌抜き打ち機（動力プレス）を5万ペソで購入した。フィリピン国立銀行 (PNB) から融資を受け、1982年初頭から使用した。原料は日本からの輸入品・軟鋼 (mild steel) の鋼板で、原料を熱して叩く鍛造、整形過程（第4図①、②）が省かれ、人件費削減につながった。ただし、同機械は型抜きを1日4000本行なえるものの、マニラ

での原料入手が難しく、手打ちの時期と比べて生産は伸びなかった。

そうした折り、1984年、原料の鋼板が日本から輸入されなくなった。外貨事情悪化のため、マニラの店が日本から鋼板を仕入れられなくなったのである。当時、フィリピンでは外貨が逼迫し、フォード、トヨタといった外資系企業も部品を輸入できず、同国から撤退したほどである。マクロ経済の悪化は地方産業に波紋を投げかけた。機械は無用の長物と化し、1985年には手打ちに逆戻りした(注9)。

同氏は、その後、自動ハンマー、鎌の刃に鉅歯(ぎざぎざ)をつける機械、商標の刻印機を購入しているが、いずれも1991年8月現在、故障し、使用されていない。ただし、1991年当時、同氏は叔母で別の工房を営むピコさんと組んで、前記フィリピン金属工業連盟の支援のもと、政府の地方家内・小工業奨励策(通称「カラカラン20」法)(注10)により、生産の機械化を進めようとしていた。自動ハンマー、鎌の鉅歯づけ機械、刻印機の導入・再使用を企画しているのである。ただし、他の経営者はこの企画に参加していない(注11)。伝統的工法の方が確実に利益を上げられ、下手に機械を購入すると、借金を背負い込む危険があるからである。

4. 産業連関

次に工房での投入財に注目して、鍛冶業と他の産業との連関関係(注12)を考察しよう。

(1) 鉄

鍛冶に欠かせないのが、原料の鉄である。アパリット、はさみの産地サンタ・ロサなどを含め、フィリピンでは古鉄や建材の鉄棒が利用されている。鎌の原料として、トラック、ジープ、バスなどのタイヤとシャフトをつなぐ円形の車輪杵(lo-

ckrim)、建築用の補強棒(丸鋼棒、cabilla)等、山刀の原料としては車輪杵や板ばね(leaf spring)等が用いられる。パウアンの工房経営者は同町やバタンガス市にある屑鉄屋から車輪杵を、建材店から建材を購入する。フィリピンでは輸入古鉄も相当流通していると思われ、原料の鉄に関しては地域の素材ばかりを用いないが、リサイクリング産業として注目できる。

原料の粗悪化問題に触れよう。鎌の生産では長く車輪杵が使われ、直径60^{mm}ほどの車輪杵が60あるいは72分の1に切断され、鍛造整形されていた。しかし、近年は鍛造の手間と原料コストを考え、建築素材である棒鋼(丸鋼棒)が利用され始めている。前者の原料を用いた鎌は最低1収穫期の使用に耐えるが、後者を用いて造られた鎌は1回の収穫期ももたず、3、4日で刃先の鋸歯がなくなってしまうという。その代わり、前者の価格が5.50〜7^{ペソ}であるのに対し、後者は4〜5^{ペソ}である。さらに近年は鋼材などを束ねる鉄束(plehe)を使う業者も出現してきた。これで造られた鎌は1本わずか3.50^{ペソ}である。他産地との競争、製品の輸出という可能性を考慮すると、原料の粗悪化は好ましいとはいえない。ただし、質の劣る原料の使用の背景にはパウアンでの業者組合の不在、過当競争、価格引き下げ競争という現実がある(注13)。

(2) 工具

(イ) 金床

鍛造工程では鉄道の線路などを利用した硬度の高い金床を用いる。以降の整形には上面が平らで、牛の角のような突き出しがあり、日本で角床と呼ばれる金床を用いる。角床は英語でアンビル(anvil)と呼ばれ、西洋起源の工具と考えられ(注14)、スペイン・アメリカ統治期、また、戦後アメリカから工具がフィリピンに輸入される中で、パウア

ンにも伝わったものと思われる。

(ロ) ハンマー

大槌、小槌を使用。

(ハ) ふいご

アメリカから輸入された製品を用いている。工具店の集中するマニラのサンタ・クルスでは電動のふいご（送風機）も販売されているが、パウアンでは手動で取っ手を回転させ、炭が熱せられる。

(ニ) 燃料

鍛冶業と炭とは切っても切れない関係にある。かつては日本でも鉄を熱する燃料源として、炭（後にコークス）が用いられていた（注15）。パウアンでも州内で山林の多いロボ（Lobo）やバタンガス市郊外で産出する木炭、椰子炭（椰子殻が原料）が使用される。より火力の必要とされる山刀生産には木炭を用い、劣る火力で十分な鎌の生産には椰子炭が用いられる。地域の炭生産がパウアンの鍛冶業を支えている（注16）。

(ホ) 握り

鎌の握りの部分には木材、山刀の握りには木材、水牛の角が用いられる。木材は軽くて、耐久性のあるバヤバスの木やラワン材などが用いられる。農家や製材所で購入する。現在水牛の角は屠殺場などから購入されるが、高価であり、より値の張る鋼入りの山刀に使われる。

こうして、鍛冶業で用いられる財を検討すると、リサイクル産業としての側面（鉄）と、地域産業との連関関係（炭、木材）が注目される。バラヤンの塩辛産業でも容器はアルコール飲料（ジン、ウイスキー）の瓶で廃品業者から仕入れ、塩は近隣のカラタガンの塩田で生産されていた。鍛冶業、塩辛生産ともに、伝統的産業は単独では存在せず、地域産業に支えられ存続している点が注目される。

5. 生産量

山刀については、刃先に鋼をはさみ込むディスボ（disubo）と呼ばれる工法では、1本を生産するのに2名の作業で1時間はかかる。1日5～6本の生産数である（注17）。鋼のはさみ込みを行わない全鋼の山刀は1日10本は造れる。

一方、鎌の場合、各工房を平均すると、1日の生産量は200本程度であり、パウアンでは1日4800本の鎌が生産されていることになる（注18）。年間では土曜日と宗教上の理由で休む工房が多いので、250生産日があるとして、120万本の生産となる。フィリピン全体の鎌の3分の1を生産しているといわれるだけある。

また、鎌の生産には季節変動が見られ、米の収穫期である9～10月、2～4月には注文が増加し、通常は週に200～300本の工房でも、週500本に達するという（注19）。したがって、非収穫期は各工房とも、在庫の増加に努め、収穫期に増加する注文にいかに応じるかがポイントになってくる。そのため、収穫期には出来高制の賃金を高くして、職人の確保に努める例が見られる（第4表参照）。

また、作業の委託、作業所や職人の貸し借りも行なわれ、ディセピーダ工房の職人が炭持ち込みでテハーダ（Tejada）工房の作業場を1日10ペソで使用したりする。特に収穫期には注文が増え、作業場、職人の貸し借りが頻繁となる（注20）。

6. 流通、販売

中間業者や店が注文を出し、それに基づいて生

第4表 職人への賃金支払い・出来高制

工房経営者名	鎌鍛造 100本につき
A・ガルシア	前打ち・向う槌各25ペソ
アセロ	前打ち25ペソ、向う槌24ペソ
ディマリボット	各40ペソ

（出所）各経営者へのインタビュー。

第5表 製品の販路

経営者名	製品の販路，特記事項
① J. Abanto	マビニ，マルバー，サント・トーマスなど。
② F. Dalangin	レメリー，パンガシナン州オルデネータに顧客あり。配達する。
③ O. Durante	マニラ，パンパンガ州アパリット，ミンダナオ。
④ D. Magnaye	バラヤン，ラグーナ州サン・パブロの店が買い上げる。
⑤ E. Dimalibot	ビサヤ地方，東西ミンドロ州，ミンダナオのコタバト，ダバオ，ビコール地方，北イロコス州，パンパンガ州アパリット。
⑦ T. Garcia	バタンガス市，タナワン，ラグーナ州，ミンダナオ。
⑧ A. Garcia	小売り—パウアン（日）—市日を利用。 卸売り—農具販売の店へ。バタンガス市，リバ，東ミンドロ州サンホセ，レイテ州タクロバン。
⑨ N. Bautista	ミンダナオ島，東・西ミンドロ州，ケソン州ドロレス，ルセーナ。
⑩ B. Abaday	ロボ（日），ロサリオ（金）。
⑪ R. Bautista	バタンガス市，東・西ミンドロ州などの市場の店に出荷。以前はパウアン，バタンガス市の市場で自ら販売。
⑫ J. Aguila	東・西ミンドロ州，ヌエバ・エシハ州，自ら配達。ミンダナオのプトゥアンに配達したこともある。
⑬ E. Abanto	パウアン，タナワンで委託販売。
⑭ L. Asero	ブラカン州，ヌエバ・エシハ州ガパン，カバナトゥアン，サンホセ，東ミンドロ州のカラバン，その他ミンドロ全域，パナイ島のイロイロ州，アクラン州，カピス州，西ネグロス州バコロドなど。
⑮ F. Abrinica	パウアンなど。
⑯ G. Roxas	ヌエバ・エシハ州カバナトゥアン，ミンダナオ，東・西ミンドロ州，ロンブロン（木）の店。
⑰ A. Desepeda	パウアン，バタンガス市，ロサリオ，パンガシナン州ダグパン，南サンボアンガ州サンボアンガ，レイテ州タクロバン。
⑱ Petronia Cordero	パウアン（日），ロサリオ（金）。市日利用。バス，ジープニーを使用。
⑲ T. Bico	ナスグブ，西ネグロス州バコロド，ブラカン州メイカワヤン，夫が届ける。
⑳ A. Cordero	バタンガス市（木），ロサリオ（金），市日利用。
㉑ J. Cordero	サン・フアン（日），ロサリオ（金），市日利用。
㉒ Pedro Cordero	サン・ホセ（日），ロサリオ（金），リバ（木），市日利用。
㉔ S. Tejada	ビサヤ地方の商人が買いつける。

（出所） 第4表と同じ。

（注）（1） かっこ内は自ら販売にいく曜日。

（2） 特に州名，島名を記していないのはバタンガス州内の市，町を指す。

（3） 丸数字は第2表などの数字と同じ。

研究ノート

産がなされる。中間業者や店は鍛冶屋が原料を購入できるように、一定額を前払いする^(注21)。中間業者の中には、経営の傍ら、他の工房の製品の卸業者となって、各地の店に届ける鍛冶業者もいる。また、自分の製品を自ら店に届けたり、州内の公設市場の市日（マーケット・デイ）を活用して、販売を行なう経営者もいる。

バウアン農具の販路はバウアン、バタンガス市などバタンガス州内、ミンドロ (Mindoro)、パンガシナン (Pangasinan)、パンパンガ、アパリ (Aparri) などの北部ルソン (Luzon)、ネグロス (Negros)、レイテ (Leyte) などのビサヤ (Visaya) 地方、コタバト (Cotabato)、ダバオ (Davao)、サンボアング (Zamboanga) などのミンダナオ (Mindanao) という具合にフィリピン中に拡がる。流通範囲は広域

である（第5表参照）。

一方、注文に応じ切れない際、他の工房や別の産地から製品を納入することがある。鍛冶産地パンパンガ州アパリットでバウアンの製品が、逆にアパリットの製品がバウアンで販売されることもある^(注22)。

7. 商標

各工房で経営者が製品に商標を刻印している。顧客確保、製品確認をはかる商標はバラヤンでの塩辛、魚醬生産でも見られ^(注23)、バウアンでも製品に対する経営者の愛着が感じられる。

第6表によれば、生産者に因む数字や名前の頭文字が多く、また、他の業者への対抗意識も窺われる。

関連して、パンパンガ州アパリットでは、“Ba-

第6表 刻印の例（鎌）

経営者名	刻印	由来
Domingo Bautista	2	不明（1987～88年調査時、すでに渡米し、操業せず）。
⑧ A. Garcia	7 MG	父 M. Garcia 氏が自分の生まれた年1907年にちなんで命名。 同父が名前の頭文字にちなんで命名。
⑤ E. Dimalibot	No.27-Bats	D. Bautista氏の「2」と M. Garcia氏の「7」を組み合わせ、1958年、命名。Bats はバタンガスの意。
② F. Dalangin	3	不明。
⑪ R. Bautista	R 3	頭文字と数字。
⑱ T. Bico	Roy Bico	夫の名前。
⑫ J. Aguila	2 3 B J	3 は好みの番号。2 については不明。 Batangas Jun の略。
⑬ E. Abant	ε.	名前の頭文字+「.」
⑯ G. Roxas	G 1 G 2	頭文字プラス1。原料に棒鋼を使用。4 ペソ。 頭文字プラス2。原料に車輪杵使用。5 ～5.50ペソ。
⑭ L. Asero	L 37 29	頭文字。 Dimalibot氏の「27」に対抗。 長さ29センチの折り畳みナイフ・バリソンの銘柄 29 bente nueve にヒントを得て。

（出所） 第4表と同じ。Domingo Bautista氏については E. Dimalibot氏へのインタビュー（1987年12月23日）。

（注） 氏名の前の数字は第3図、第2表などと同じ。

tangas 7” 印の鎌が15ペという高値で売られていた。もう一種は“33”という刻印の入った鎌で、アパリット産だという。産地間の製品流通の例であり、店の話ではボタンガスという刻印が入ると、その地名が入らない製品よりもよく売れるという。アパリット印の鎌は存在しないようであり、ボタンガス鎌の商標の強さを感じさせた(注24)。

8. 製造者組合について

パウアンでは鍛冶業者の製造者組合が存在しない。アパリットではそうした組合があるとも伝えられるが、実際は何の機能も果たしていないようである(注25)。塩辛生産地であるバラヤンや、パンガシナン州リングエン(Lingayen)には製造者組合があり、組合不在はパウアンで問題となっている。なぜなら、製造者組合には、(1)大量注文、(2)大量生産、(3)製品の規格統一、(4)品質向上、(5)製品の直接受注・販売を通じての仲介業者の排除、それによる製品価格の抑制というメリットがあるからである(注26)。原料の大量納入により、原価を下げられるという利点もあろう。

過去に結成の動きはあった。1946年、当時の実力者ドミンゴ・パウティスタ(Domingo Bautista)氏が契約者組合(Asociación Contratista)を結成した。1年間は続いたが、同氏による組合独占に対する反発があり、挫折したという(注27)。その後、同地では組合は結成されなかったが、1968年にE・ディマリボット氏によって結成がはかられた(注28)。

しかし、同組合も業者の協力を得られず、1年足らずで、失敗に終わった。特に製品への需要が高まる収穫期には注文が殺到し、商人が高い卸値を提示し、そこに販売する業者が続出したためである。経営者の数も多く、各々自分の得意先を持っていた点もマイナスに作用した(注29)。

1987～88年時、「各自が顧客を増やすしかない」という状態(注30)で、91年調査時も同様であった。前述の機械化の件でもデュランテ氏に協力するのはビコ(Bico)工房だけであり、零細資本の分裂状態が続いている。

ただ、既述のようにセブンス・デイ・アドベンチストに有力な9業者が加入したり、日常的な親族関係も密である。これらを通じて情報が相互に交換される。また、狭い地域に業者が集中していることもあって、生産や販売の秘密を保つのは難しい。つまり、組合がなくとも業者は他業者や技術、原料についての情報を得やすい。

ちなみに、バラヤンの塩辛産業の組合は生産・販売の統合は行なわず、組合員からの一定額の拠出、それに基づく融資、共同の瓶、シール造りが中心であった(注31)。生産・販売の一括となると、利益分配、割り当て生産量など業者の利害により密接に関わってくる。そのため、バラヤンの例ではそこまで組合が立ち入らないようにしていた。そこで、パウアンでも組合を組織し、生産・販売の一括よりも原料の共同購入、組合員の一定額の拠出、それに基づく融資など、極力業者の利害がぶつかりにくいプログラムから活動を開始したらどうかと思われる。古鉄、炭、握りの原料の木材、水牛の角、グラインダーなど投入・資本財の共同購入は大量納入により仕入れ価格を下げ、組合員の利益増加につながる。業者共通の最大の問題＝資本不足(後述)に対応するため、融資活動も必要である。さらに組合結成は市場拡大にもつながろう(注32)。日本の鍛冶産地で生産者の協同組合が作られ、在庫処理、販路確保で貢献している例(注33)から考えても、パウアンでの組合結成が望まれる。

(注1) 屑鉄、炭などの投入財は他地域でも入手できる。製品市場マニラとの距離も考慮すべきだが、鍛冶業集中地がパウアンに特定される理由にはならない。

(注2) 松野純孝編『新宗教辞典』東京堂出版 1984年 202ページ／『キリスト教年鑑』キリスト新聞社 1988年 249ページ。

(注3) 1980年、町の人口4万3560人中、ローマ・カトリックは4万2423人、プロテスタントは471人、イグレスシア・ニ・クリストは283人、その他は383人である。Municipality of Bauan, Province of Batangas, *Comprehensive Development Plan, 1985-2000*, パウアン, 1982年, 26ページ。

(注4) B・アバダイ氏は1956年セブンス・デイ・アドベンチストの信者との結婚に際し、カトリックから改宗した。同氏への前掲インタビュー。

(注5) マックス・ウェーバー著 梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』上下 岩波書店 1955年。

(注6) ディセビーダ工房ではセブンス・デイ・アドベンチストの活動を通じ、ケソンや東ミンドロ州の青年職人を雇うことができた。妹M・ブリオネス (Briones) さんへのインタビュー, 1991年8月21日。

(注7) 同派の教会は鍛冶屋村にあり、経営者と職人も集まりを通じて親密感を深めているようである。筆者も礼拝に出席した (1988年1月9日〔土〕)。

(注8) カピテ州カルモナでは鍛造工程で自動ハンマーが使用されている。同地で工房“FM Blacksmith”を訪問した(1992年9月11日)。

(注9) 以上、デュランテ氏、同氏の父コスメ・デュランテ (Cosme Durante) 氏へのインタビューによる (1987年12月18日)。

(注10) 共和国法6810号。通称“Kalakalan 20”。1989年12月14日成立、90年3月実施。被雇用者20名、資産50万ペソ以下の事業所に対し、地方・国税免除などを定めた。Zaragoza, Gerry, “Kalakalan 20 Signed into Law,” *Manila Chronicle*, 1989年12月15日。

(注11) 同企画についてはO・デュランテ氏へのインタビュー (1991年8月21日) および、MIAP, 前掲報告書。

(注12) 産業連関についてはA・O・ハーシュマン著 小島清監修・麻田四郎訳『経済発展の戦略』巖松堂出版 1951年。

(注13) MIAPも「販売が組織化されていないので、業者はしばしば価格を引き下げざるを得ない。そのため、質の劣る製品が増えてきた。多くの工房が建築補強材と

いう不適切な原料を使っている」と指摘している。MIAP, 前掲報告書, 16ページ。

(注14) 小野忠重編『西洋職人づくし』岩崎美術社 1970年。

(注15) 森清『町工場——もうひとつの近代化——』朝日新聞社 1981年 24ページ／鈴木・竹村 前掲書 54ページ参照。現在日本ではふいご、火床ではなく、重油、プロパンガスを燃やす電気炉がよく利用されている (土佐山田町での筆者による調査より)。

(注16) ロボにて炭生産業フィリモン・ババオ (Filimon Babao), シゴンド・ババオ (Sigondo Babao) 夫妻, 炭出荷業者マリアノ・ビコ・ルントク (Mariano Vico Luntok) 氏にインタビューした (1988年1月25日)。

(注17) 日本では刃金付けという (朝岡康二「鉄と鍛冶の道具と技術」[『あるくみるきく』所収] 37ページ)。J・コルデロ氏の作業を見学した (1987年12月2, 8日)。

(注18) 金床が7つのA・ガルシア工房では1日200本, 15~16名の職人を抱えるディマリボット工房では同400本程度に達するという (各前掲インタビュー)。

(注19) 工房経営者T・ビコさんへのインタビュー (1988年1月14日)。

(注20) ディセビーダ工房では鎌の焼き入れ作業をダランギン (Dalangin) 工房やテハーダ工房に委託していた (1988年1月7, 13日の見聞)。

(注21) MIAP, 前掲報告書, 13ページ。

(注22) アバダイ (Abaday) 工房で鎌が品不足の場合、テハーダ工房から融通してもらう (1988年7月15日, アパリットでの調査)。ディマリボット氏もアパリットの鍛冶業者を訪れ、鎌を仕入れるという (前掲インタビュー②)。

(注23) 拙稿「近代化と伝統的技術……」72, 77ページ, および71ページの第3図を参照されたい。

(注24) 1988年7月13日, アパリットの鍛冶屋J. C. Metal Craft Pandayでの調査。パウアンの鎌は刃先に鋭い鋸歯状の加工がされ、切れ味で他産地を凌ぐといわれる。MIAP, 前掲報告書, 26ページ。

(注25) 国家国内工業開発庁 (NACIDA) の調査書 *NACIDA Region 3, Registered Metalcraft Producers Situation in Apalit, Pampanga*, マニラ, 1986年によると、「アパリット生産者組合」が1981年設立され, 68業者が加盟したという。ただし, 金属産業研究開発センター (MIRDC) の職員ノラスコ (E. V. Nolasco) 氏によると, 生活改善運動 (KKK) の融資を受けるための名目的結成で, 内実はないそうである (1988年3月23日のインタビ

ュー)。

(注26) 野沢 前掲論文 275ページ。

(注27) ディマリボット氏へのインタビュー (前掲インタビュー②)。

(注28) ディマリボット氏は当時を次のように振り返る。「仲間の工房を訪れて組合結成の必要性を説いたものです。競いあっていたのでは効率が悪い。販売を一括し、売り上げを安定させ、職人の生活も向上させなければならぬ」(同上)。

(注29) 工房経営者N・パウティスタ (Nehimias Bautista)氏、アセロ (Asero)氏へのインタビュー (1987年12月15日、88年1月20日)。

(注30) アセロ氏へのインタビュー。

(注31) 拙稿「近代化と伝統的技術……」参照。

(注32) 販路確保上、特に小規模な工房には組合が必要という意見が多かった。P・コルデロ (Cordero)氏、N・パウティスタ氏、R・パウティスタ氏への各インタビュー (1987年12月9、15、18日)。

(注33) 土佐山田町の土佐刃物流通センターは組合員生産者の製品を通常卸価格の7割で購入し、販売された際に残りの3割を支払う (筆者による前掲調査)。

IV バウアンの鍛冶業

——問題点——

1. 資本の不足

経営上の問題点として、資本の不足という回答が最も多かった。「一番の問題は資本不足」、「生産を増やしたいが、資本が足りない」、「作業場のトタン屋根の穴もふさげない」などの声があった(注1)。山羊の飼育、衣服の卸といった副業に従事する例もある(注2)。

こうした資本不足を含め、家内工業の諸問題に対応する政府機関として、かつて国家家内工業開発庁 (National Cottage Industry Development Authority : NACIDA) があった。1962年、家内工業の育成・保護を目的に設立された同庁は87年アキノ前政権下、廃庁された。経費削減、他省庁との業務の重複を避けるためである(注3)。現在、通

商産業省の中小企業開発局 (BSMBD) などが業務を引き継いでいる。同庁存在当時、バウアンの工房の半分が同庁に登録し、所得税、地方税免除などの恩恵を5年間は受けた。7軒は融資も受けており、NACIDAの援助は小さいとはいえない。ただし、工房の中には、融資を断られた、あるいは資本の小さい工房は融資を受けられないと考え、登録、融資申し込みをしなかった例もある。

一方、ディマリボット氏は政府系の農村銀行 (Rural Bank) から1980～83年に計10万ペソを借りた。当時利子率は年16～18%であったが、1985年48%に急騰し、急遽、借用額を返済したという(注4)。デュランテ工房での鎌打ち抜き機のケース同様、この事例でも当時のマクロ経済の悪化がバウアンに波及したことが分かる。その他政府系の銀行としてはフィリピン国立銀行が同地の鍛冶業者に融資を行なっている。

さらに、民間融資組合としてバナブラ信用組合 (Banapra Credit Cooperative) がある。1985年2月、バタンガス州内の当時 NACIDA 加盟の家内工業経営者が会員となり、州内の家内工業振興を図るため設立した(注5)。鍛冶屋村では5工房が加盟し融資を受けている。これらは経営の安定した業者であり、いずれもセブンス・デイ・アドベンチストのメンバーで、宗教活動を通じた情報の流れがある。ただ、より経営の安定していない業者は加入しておらず、存在さえ知らない(注6)。そのため、多くの経営者は親戚や知人に資金を借りたり、金貸しから、「ファイブ・シックス」と呼ばれる最低利子20%の借金をせざるを得ない。

2. 労働者の不足

近年若年層は鍛造に見られる鍛冶業の厳しい労働を忌避し、バウアンでは労働力不足が深刻なようである。また、鍛冶業経営者も子弟に高い教育

を受けさせ、子弟が会社勤務、医師になる例も増えている。さらに、パウアンでは大規模な造船所、建設会社もでき始め^(注7)、海外出稼ぎが見られたり、日本の鍛冶業同様、若年労働者のリクルートが難しくなっている。したがって、パウアンでは注文の殺到する時期は労働力不足が深刻となり、職人が工房の掛け持ちや、グラインダー掛けの下請けを増やしたりする。小規模な工房は注文に応じ切れなかったり、在庫をあまり増やせなくなってしまう^(注8)。

この点で、科学技術省下の金属産業研究開発センター (Metal Industries Research and Development Center: MIRDC) が注目される。マニラに工場施設を持ち、金属加工の研究、研修を行なっている。パウアンのディマリボット、アバダイ氏も訪問したり、ラグーナ州サンタ・ロサのはさみ工場経営者もセンター主催のセミナーに参加したことがある^(注9)。

また、労働力不足に対応して、筋力を著しく要する工程を機械化し、労働生産性を上げようとする企画が前述の自動ハンマー導入計画である。これは、MIRDC、フィリピン金属工業連盟 (MIAP) による金属機械産業支援プログラムのひとつでもあり、労働力不足への対応策としても有効かも知れない^(注10)。一方、大学教育などを受けなかったいわゆる非就学青年 (out-of-school youth) にとっては鍛冶業は一定の雇用吸収力を発揮している^(注11)。ただし、フィリピンでは非就学青年層は安い労働力の供給源でもあり、パウアンでも出来高制で賃金を受け取る職人の収入は多いとはいえない^(注12)。

3. 収入の不安定

米の収穫期には鎌への注文が殺到し、職人も不足するが、他の月は注文が減る。こうした季節による注文の変動に対しては生産・資本規模の大き

な工房ほど対応しやすく、小規模な工房ほど負担が大きい。注文の少ない季節は1週間生産を行わない時もある^(注13)。注文、生産の季節性は収入の不安定につながる。

4. 販路の確保

州内の市場で自ら販売したり、各地に製品を送っても、統一した組合がないため、各業者が自力で市場を開拓しなければならない。

5. 過当競争

24軒も比較的狭い地域に集中するため、過当競争が見られる。原料が鉄棒、車輪杵のいずれでも、鎌1本につき、純益が50%という例さえ見られる。同地に同業者が多いため、利益増加のための値上げができないのである^(注14)。価格を上げれば、他の産地に負ける可能性もあるが、業者が価格を抑えねばならないのは過当競争故である。実際、競争に破れ、休廃業した例も2軒あった^(注15)。

(注1) 順番にF・ダランギン氏 (1988年1月13日)、L・アセロ氏 (前掲)、J・アギラ (Jun Aguila) 氏 (87年12月21日) へのインタビュー。

(注2) 山羊の飼育はN・パウティスタ氏、衣服の卸はロハス夫妻の例。各々へのインタビュー。1987年12月15日、88年1月6日。

(注3) 1987年2月27日、アキノ大統領 (当時) が署名した行政命令133号に基づく。同年10月に執行 (1988年3月7日 NACIDA へのインタビュー)。NACIDA については NACIDA, *Progress for the Grassroots*, マニラ, NACIDA, 1983年/稲田 前掲書を参照。

(注4) ディマリボット氏へのインタビュー (前掲インタビュー②)。

(注5) 1985年、NACIDA 下のバタンガス NACIDA 生産者組合 (略称バナブラ。Batangas NACIDA Producers Association: BANAPRA) が経済危機のため、消滅。そこで、そのメンバーが中心になり、バナブラ信用組合を発足させた。100ペソの会費積立金を支払えば、1000ペソの融資を受けられ、利子率も低い。Abanador, Victor R., *Success Story: BANAPRA Cooperative, Inc. Cooperative Union of Batangas, Inc., 1st Anniversary*,

バタングス市、1986年12月14日、ページ数記載なし。組合長M・アルシナス(Manuel G. Arcinas)氏にもインタビューした(1991年8月22日)。

(注6) テハーダ氏は「バナブラ? それは何のことですか」と発言した(同氏への前掲インタビュー)。

(注7) Office of the Municipal Planning Development Coordinator, *Bauan, Your Investment Haven*, バウアン, Municipality of Bauan, 出版年月日不明, 7～8ページ。

(注8) 職人D・カベナル(Donesio Cabenal)氏(44歳)は週2日アバダイ工房, 3日ディセピーダ工房で働く(1987年12月15日, 同氏へのインタビュー)。また, J・アギラ氏は労働力不足故, 鎌200本造るのに2週間かかることもあるという(同氏への前掲インタビュー)。

(注9) Nolasco, Emmanuel V.; Florentino M. Cusasay, *Report on the Visits to the Farm Tools and Cutlery Industries of Pampanga, Batangas and Albay*, メトロ・マニラ, Metal Industry Research and Development Center(MIRDC), 1982年。

(注10) O・デュランテ氏へのインタビュー(1991年8月21日)。アメリカ国際開発庁(USAID)援助による通商産業省の中小企業開発プロジェクトに採用されるようにMIAPがフィジビリティ調査を行なった。MIAP, 前掲報告書。

(注11) O・デュランテ氏は職人の多くが高等教育を受けられなかったという(同上インタビュー)。ディセピーダ工房でも17, 19歳の非就学青年が職人として働いていた。

(注12) 1991年時職人の1日の収入は70～80ペソであり, マニラ首都圏の産業労働者の法定最低日給104ペソより低かった(1991年8月23日, J・アギラ氏へのインタビュー)。同国の家内工業での低賃金状態については, Rutten, Rosanne, *Artisans and Entrepreneurs in the Rural Philippines: Making a Living and Gaining Wealth in Two Commercialized Crafts*, アムステルダム, VU University Press, 1990年, 27～28ページ。

(注13) T・ピコさんへのインタビュー(1988年1月14日)。実際, 2つの工房では1週間午後の作業が行なわれていなかった(1988年1月8～14日の見聞)。

(注14) ダランギン氏へのインタビュー(1987年12月23日)。同様の発言はP・コルデロ(Petronia Cordero)さんもしている(同日インタビュー)。

(注15) うち1業者は廃業後, 2年間ベラウ共和国で出稼ぎをし, 鍛冶業を再開する予定はないという(1988年1月19日, F・エスカロナ[Florencio Escalona]氏

へのインタビュー)。なお, アフリカの農機具生産者(伝統的鍛冶屋, 近代的な鍛冶屋, 近代的な農村の機械工)の問題点として, 屑鉄など原料の非効率な供給体制, 資本の不足, 事業の季節性, 訓練の不足, 製品の低品質があげられるという。これらはバウアンと共通する。*The Development of African Capacities for the Design and Manufacture of Basic Agricultural Equipment*, Sectoral Working Paper Series No.2, Sectoral Studies Branch, Division for Industrial Studies, UNIDO, IS.379, 1983年3月29日, 4ページ。

V 展 望

一般に中小・家内工業には以下の利点がある。すなわち, 小資本で創設でき, 地域の素材を用い, 外貨を喪失する恐れがなく, 原料を取り扱う地元業者が恩恵を受けられ, 地域の伝統的な知恵を用い, 地域の人々の誇りを培える^(注1)。さらに, 労働集約的で, 雇用問題に貢献できる。

それゆえ, 1986年アキノ政権下制定された中期開発計画はフィリピン経済再建のため, 中小・家内工業の育成を提唱していた^(注2)。

一方, バウアンでは1981年, マルコス政権下で開始された家内・軽工業, 家畜・養殖事業などへの支援政策, 「生活改善運動」(Kilusang Kabuhayan at Kaunlaran: KKK)の恩恵を受けた業者はいなかった。塩辛産地のバラヤンではKKKは不評さえ買っている^(注3)。この点で, 通商産業省の中小企業発展プロジェクトとして, MIRDCの協力のもと, バウアンで前述の鍛冶業機械化が進められるかどうか, 注目に値する^(注4)。

ここで, 地域経済と国民経済との関連に触れると, バウアンの鍛冶業者が国民経済の影響を受けたのは鎌抜き打ち機の使用不能化, 銀行利子率の上昇など, 否定的な例が多い。では, 逆に鍛冶業はフィリピン国民経済にどの程度貢献しているの

であろうか。前述のようにバウアンでは年間の鎌生産量が120万本とすると、フィリピン全体の生産量はその3倍の360万本となる。1本6ペとして、全体の売り上げは2160万ペ。この額は同国の上位から2000番目の企業の粗収入に相当する。鍛冶業が国民経済に無視し得ない貢献をしているといえよう(注5)。

また、インドネシアのジャワ西部で伝統産業を調査した村井吉敬氏(上智大学教授)は同地の伝統産業の展望をこう記している。

- (1) 外国ないし国内代替製品流入による地場産業の衰退。
- (2) 華人・華僑への資本集中ないしそれらによる支配。
- (3) 民衆の必需品を供給する産業としての存続ないし伸長(注6)。

これをフィリピンの鍛冶業と照らし合わせると、まず、(2)についてはバウアンの場合、華人・華僑の存在は見られず、今後華人が資本を集中する可能性は低い。この点、フィリピン人が純粋に資本を握るアバリット、サンタ・ロサなど他の鍛冶産地も同様である。ジャワの事情は華人の人口比率の低いフィリピンにはそのまま当てはまらない。

(1)の外国製品の流入については農業機械化にともない収穫機やコンバインが導入される可能性も皆無とはいえないが、別の産地アバリットでは日本の農機具メーカーの耕うん機の刃を生産する鍛冶業者が存在する(注7)。したがって、鎌に代替する製品(収穫機、コンバイン)が輸入あるいは国内で生産されても、鍛冶業がその部品を生産する形で生き延びることはできる。しかし、外国企業がフィリピンで収穫機械を生産し、その刃をバウアンなどの鍛冶業者が生産すると、外国企業の下請け生産となる。一方、フィリピンで民族資本が

収穫機を造り、部品を鍛冶業者が下請け生産すれば、民族資本間の産業連関が生まれる。この意味でも民族経済の進展が望まれる。ただ、フィリピン全土で農業の機械化は全体として進んでおらず、代替産業(農機具を生産する近代的企業)による衰退という可能性も低いと思われる。

そこで、(3)民衆の必需品を供給する産業としての存続ないし伸長という可能性が注目される。この点は政府機関の支援が組合など生産者による自助努力とどう連関を持つかにかかってくる。通商産業省、BSMBDは販路拡大、経営アドバイス、産地間の一層の交流といった面で果たすべき役割がある(注8)。金属加工技術、技術者養成、機械化についてはMIRDCも期待される。これに関連して、魚醬生産の地バラヤンでは生産者組合が政府機関・産業技術開発研究所(Industrial Technology Development Institute: ITDI)と連携し、魚醬生産の「新機軸」を導入しようとした事例があった(注9)。このケースは成功しなかったものの、生産者組合があると政府機関との協力を含め、さまざまな試みが容易となりうる。こうした意味でもバウアンの鍛冶業者にも組合が結成されることが望まれる。事実、同地の鍛冶業の将来を心配する人々は組合の必要性を痛感している(注10)。A・カスティリョ(フィリピン中央銀行元総裁)も家内工業の問題点として資本不足、販売・製造方法、製品供給の不安定を挙げ、それらを解決する最良の手段として生産者共同組合の結成を提唱していた。組合が低利子で会員に融資を行ない、品質向上、規格化、宣伝、製品の販売にあたる、個人主義を乗り越え、組合を結成することに家内工業の未来があるというのである(注11)。

低利子の融資はバラヤンの魚醬生産者組合が行っており、同組合は製品を詰める瓶の自主生産

を企図したほどである。また、宣伝により市場を拡大し、鍛冶業者の悩みである資本の不足、販売の不安定性を是正し、職人の雇用保障に努めることができる。

さて、冒頭で述べたようにバタンガス州には多種多様な地方産業、中小・家内工業が残っている。フィリピン全国に視野を拡大しても、それぞれの地方に地方産業が根強く存在している。それらが販路を拡大しつつ、生産規模を増やし、品質を向上させ、さらには輸出レベルにまで達していく。つまり、地場産業の成長の結果として、中堅・大企業が育成されていく。産地間の競合、競争を通じて、各産地が競争力を高めていく。また、大規模産業部門で、民族企業を発展させ、中小・家内工業との連関効果を生み出す。この政策には国家による指導、支援が必要になってくるだろう。加えて、需要の増加要因として、消費者である農民労働者の所得向上も図られなければならない。この意味で農地改革や累進課税の徹底的な実施、福祉予算の拡充も必要であり、フィリピン社会・経済の大幅な変革が課題になってくる。国家予算を圧迫する対外債務の問題も絡んでくる^(注12)。

そこで、日本を含む先進国からの援助も検討せねばならない。地方産業、中小企業に対する援助としては MIRDC にも日本の技術協力がなされ、機械類が送られたことがある^(注13)。さらに有効な援助として発展途上国の地方の産業に直接外国政府の援助がなされるべきかどうか、検討してみたい。この点に関しては、日本の政府開発援助について研究を行なった横山正樹氏（四国学院大学教授）が「自力更生の主体と結び付かない援助は必ず失敗する」と指摘されている^(注14)。地方の産業の生産者組合がすべて必ずしも厳密な意味での「自力更生」を目指すとはいえないものの、地域

の人々の福利、厚生を自らの原料、創意を用いて高めようとしている点から判断すると、こうした組合は自力更生的性格をそなえるといえよう。少なくともフィリピン経済の外国への従属的状态からの脱却に貢献し得る意味で、これらの組合は自力更生型といい得るだろう^(注15)。そうした動きに対しては外国からの資金・商品・技術援助がなされても良いのではないか。

いずれにせよ、地域の人々が地域の素材を用い、伝統的な技術に依拠し、生業に欠かせない製品を生産している。地域の人々が所有、経営する事業が今後いかに進展していくか。フィリピンの自立的・内発的発展の可能性を占う意味でも今後とも注目する必要がある。膨大な対外債務を抱えるフィリピンが民族的産業化を進展させる上でも、こうした地方産業は大いに伸長されるべきである。バラヤンの事例のように生産者組合など、生産者の自助努力も要請されようが、政策者による政策重点の見直しも徹底するべきである。

(注1) Topacio, Emmanuel U., "Introduction," *All You Need to Know about Cottage Products Exports*, マニラ, Communications Industries International, 1987年, ページ数記載なし。

(注2) Republic of the Philippines, *Medium-Term Philippine Development Plan, 1987-1992*, マニラ, 1986年, 43, 145, 153ページ。

(注3) 拙稿「近代化と伝統的技術……」79ページ参照。KKKについては, Garcia, Ligaya B.; Ruth G. De Lara, *Livelihood Series, Cottage and Light Industries from Plants*, マニラ, National Bookstore, 1984年, 1～22ページ。

(注4) バウアン町長は鍛冶業は衰退産業であり、今後は大規模産業誘致に期待すると述べた。鍛冶業については、業者がまとまらないので、支援しにくいとのことであった（1991年8月22日、B・カスティリョ〔Bienvenido Castillo〕町長へのインタビュー）。

(注5) Mahal Kong Pilipinas Foundation, *Phil-*

ippines' Best 1000 Corporations, 1989年版, マニラ, 1989年, 108~109ページ。また, ジャワで村落工業(織布と瓦産業)を調査されたアジア経済研究所の水野祐祐氏は次のように指摘する。「小工業, 伝統産業など住民にとって空気のようにになっている産業が実は住民の生活を強く支えているのではないか。しかも, それらは近代工業に圧迫されながらもしぶとく生き残り, 不況に対しても近代工業よりもむしろ影響を受けずにいる」(「西ジャワ農村経済調査を終わって——農村工業と地域経済——」早稲田大学社会科学研究所での研究発表 1987年2月)。

(注6) 村井吉敬「西部ジャワの村落工業——スメダン県を事例にして——」(早稲田大学社会科学研究所インドネシア研究部会編『インドネシア——その文化社会と日本——』早稲田大学出版部 1979年) 262~264ページ。

(注7) アバリットの生産者組合が同地に立てた宣伝看板には「久保田の刃を製造」と書かれている(1988年7月13日の現地調査)。フィリピンには久保田鉄工社が進出し, 耕耘機を製販, トラクターを販売している。週刊東洋経済臨時増刊『海外進出企業総覧』1989年版 391ページ。

(注8) パンガシナン州の州都ダグパン(Dagupan)市にある通商産業省の支局は同州の塩辛産業に対し, 調査, 取り引きの紹介に努めている(1989年8月26, 30日

訪問インタビュー)。

(注9) 魚醬生産に日本の麴を利用しようという試み。拙稿「近代化と伝統的技術……」79~80ページ参照。

(注10) セブンス・デイ・アドベンチスト牧師へのインタビュー(1988年1月19日)。

(注11) Castillo, Andres V., *Philippine Economics*, 改訂版, マニラ, 出版元不明, 1969年, 283ページ。

(注12) 対外債務のフィリピン経済への影響については拙稿「外国人労働者問題の経済構造——フィリピンの人々はなぜ日本へ働きにくるのか——」(『法学セミナー増刊・外国人労働者と人権』〔総合特集シリーズ42〕日本評論社 1988年)を参照。

(注13) 日本政府から技術協力として, 1980年7月から86年1月まで金属鑄造技術センターへの援助がなされた。外務省経済協力局編『我が国の政府開発援助』1990年版 下巻 国際協力推進協会 1990年 109ページ。

(注14) 横山正樹『フィリピン援助と自力更生論——構造的暴力の克服——』明石書店 1990年 313ページ。

(注15) 横山氏は自力更生を, 「構造的暴力をその被害者たちが克服するための主体的かつ意識的営為の過程」と定義する。(同上書 4~5ページ)。家内工業従事者が自ら生産者組合を作り, 生活向上を目指すならば, それは貧困という「構造的暴力」を克服する主体的かつ意識的営為と呼び得よう。

(四国学院大学助教授)